2022年8月1日　アクセス　（1976年11月10日第三種郵便物認可）　第547号

地方小出版 情報誌 アクセス

毎月1回　1日発行
購読料　定価150円
（本体136円）
年間1,500円（税込み）
振替　00120-0-19017

発行所　㈱地方・小出版流通センター
編集　アクセス編集委員会
〒162-0836　東京都新宿区南町20
TEL.03-3260-0355　FAX.03-3235-6182

本を種に、文化を伝え継ぐ

一石を投じて、新しい価値を示す役割

文／白船社代表・柏田 花

1980年、父は出版社を始めた

人生には、行きがかり上、ということがある。

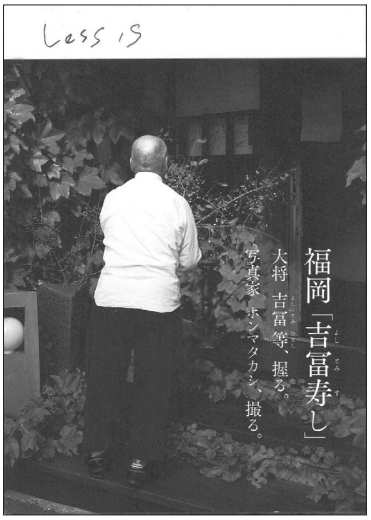
出版社に就職したことも、編集の仕事についたのも、自分で決めてコマを進めてきたとは言いがたい。ましてや独立して家業の出版社を営むことになろうなんて、夢にも思っていなかった。

私の実家はちいさな出版社だった。屋号は「舷燈社（げんとうしゃ）」。「舷燈」とは、船尾に掲げられた航海灯のこと。海路をほの照らす、静かで決して消えない灯り。祖父は造船業、曾祖父は船乗り。そんな家族代々の縁と屋号を重ね、1980年8月26日、私が生まれた日を創業日として、父・柏田崇史はひとり出版社として出帆したのだった。

主な分野は詩歌や俳句。もともと詩が好きだった父は、大学進学を機に上京するも、学校へは行かずに神田神保町へ通い、昭森社という詩壇の出版社でアルバイトに明け暮れた。卒業後も机を間借りして、半年間ほどは編集として面倒を見てもらっていたらしい。

舷燈社を立ち上げてからは365日仕事場に行き、「揺れども沈まず」を社訓として、遊ぶように本をつくっていた。今でいう「職住一体」のかたちで、住まいと仕事場は目と鼻の先。もちろん苦労も多かっただろうが、父にしてみれば本づくりは決して労働ではなく、むしろ遊びの延長にあったように思う。

父は編集者というか、装幀家的な側面を持ちあわせていた。仕事部屋にはいろんな紙があって、紙やら箱やら、



『Less is』
吉冨等・著　ホンマタカシ・写真
白船社刊　B6判上製　96頁
本体価格3000円＋税　ISBN978-4-87782-147-0

書体に印刷、とまるで工作を楽しむように造本に興じていた。

美術家と協働して、鉱石を使って空中に漂う音を拾うという「鉱石ラジオ」を創作したり、酒を搾るのに使った酒袋を旅土産に買って帰れば、「この布で特装本をつくろう」と仕立ててしまったこともあった。

造本感覚というか、自由な工作感覚で何でもかんでもつくってしまう気質は、おのずと育児にも及ぶ。たとえばノートにしてもお手製が常。こちらは流行りのアニメキャラクターのかわいいノートが欲しいお年頃だったのにもかかわらず、束見本をあてがわれたり、紙を綴じて布張りした手づくりノートなんかもよくつくってくれた。

「おれ、毎日遊んでっからな」

ドヤ顔でそう言いながら、自分の純なるものを貫くように本をつくっていたのかもしれない。たばこをふかし、ウイスキーをあおり、この世を去るまでの足掛け36年、約400点の書誌を世に送り出した。

京都からのご縁

で、こちらはというと、自分自身、本が好きで、本がつくりたくて、出版の世界に入ったわけではない。

一応跡を継いでおきながらこんなことを言うのは申し訳ないのだが、私は舷燈社の仕事をあまり知らない。学生時代はずっとバトントワリングというスポーツに熱中して練習漬けの日々だったし、父とは家族としての時間は過ごしたが、仕事はともにしていない。

「父は父、私は私」

なにによりそう思っていた。時たまできあがった本を見せられて「どう？」と問われれば、「んー、白い本だね」と塩反応。褒め言葉のひとつでもかけてあげればよいものを、そこまで関心が芽生えていなかったというのが本音である。父さん、ごめん。

がしかし、である。血は争えないというか、歴史は繰り返すというか、運命はするりとやってきた。大学時代にバックパッカーでユーラシア大陸を一年かけて放浪した後、春の京都を訪ねたのが運のツキだった。

「なんて美しいところ！　住みたい！」

たおやかに咲く桜の下で歓喜の電流が走った。すっかり陶酔して一念発起。就職先を探すことにした。

いかんせん根っこは京都に住みたい一心。印刷業、和菓子やお香の老舗など、京都に本社のある会社ばかりを受けた。そしてどれも全落ち。その時点で出版社という選択肢は思い浮かばず、一社も受けずじまい。そんなこん

なで就職活動も下火になった秋、大学構内で偶然求人貼り紙を見つけた。京都にある茶道美術の専門出版社。勤務先は東京。編集職。

「お茶は子どもの頃にかじったことがあったし、本ならイヤじゃないか」

そんな軽い気持ちで面接に行ったところ、あれよあれよとご縁ができたのだった。

16年間にわたる在職中は、編集屋として衣食住をはじめとする日本文化の深淵を泳いだ。結果的に京都に住むことはなかったが、上洛の機会はぐんと増えたし、茶人・画家・作家・写真家・デザイナー・僧侶・大工・庭師・研究者・料理人など、世俗さまざまな人たちとの対話に恵まれたことは、本当に幸運だったと思う。質直に積み重ねられ、練られた仕事に人。教わることのどれだけ多かったことか。いつも頭の下がる思いだった。

一方で、どんなにすばらしい文化でも、高齢化や後継者不在などの問題で、斜陽にあるものがいかに多いかも目の当たりにした。もどかしさに地団駄を踏んだことは数知れず。

伝統や文化を未来に伝え継ぐために、自分にできることはなにか。彼らの後継者になるには時間も身体も足りない。けれども出版を通じてなら、時代と時代をつなぐかすがいとして一助になれるかもしれない……。

こうして〆切に追われる日々のなか、切なるジレンマをたぎらせていた。

独立のきっかけは、おすしの写真集

そんななか、独立への引き金を引いたのは、のちの白船社一冊目だった。

一冊目『Less is』は、おすしの写真集。福岡の老舗寿司店「吉冨寿し」の先代大将が生み出すおすしのひとときを、写真家・ホンマタカシ氏が撮り下ろした一冊だ。

じつは、この吉冨寿しは私自身が客として十数年通っていた場所。まず外観からして独特で、蔦一面に覆われたひなびた店構え。看板はない。入口の小脇には、鯛をかたどった菓子型がはめ込まれていて、「Yoshitomi」と小さく書かれているだけ。店内に入ると一枚板のカウンター。ガラスケースもお品書きも、余計なものは一切なく、おまかせで十数カンをいただくのみ。美しい味の先にさまざまな感謝や敬意が去来する、静閑なおすし。息を呑むように手仕事を見つめ、食べ終わると思わず手を合わせてしまう。そんな唯一無二のおすしに魅せられて、大将の仕事を詣でるために福岡へと通っていた。

そんな敬愛の念から「本がつくれたら」とは薄々思っていたものの、なまじ思い入れが強すぎて、夢抱くも現実は進まず。いたずらに時間は過ぎていった。

が、きっかけは突然訪れる。コロナ禍の秋ただ中、「来年の1月で大将が引退する」という報せが届いたのだ。聞けば、店は続くが世代交代のときだという。引退まで半年を切っていた。大将のおすしが食べられなくなることはもちろんだが、惜しむらくはこれまで見つめてきたあの美しい手仕事にお目にかかれなくなることだった。多くの客は惜しむだろう。でも、伝説になるだけではもったいない。本というかたちある姿で後世にも伝えたい。そう思った。

おすしから授かってきたものへの御恩返し。出すなら自分の手で。会社員と二足のわらじは履けない。ならば独立して自分の屋号で。本づくりと独立、腹を括ってからは早かった。

「本をつくらせていただけませんか」

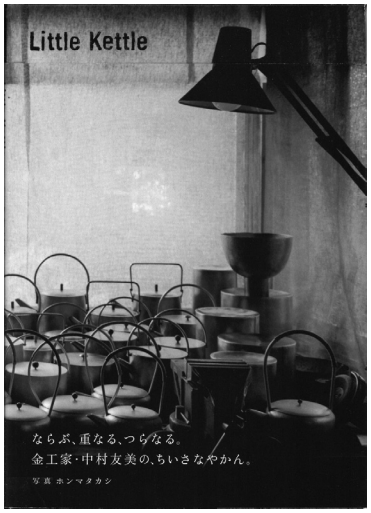
大将に手紙を書き、ホンマさんにも快諾していただき、ささやかな貯金を投じて一気につくった。

書名の『Less is』は大将の好きなことばで、近代の建築家ミース・ファン・デル・ローエの「Less is More」から。少ナイホド豊カ、という意味である。

「白船社」という屋号もそのときに決めた。しろふねしゃ、と読む。黒船じゃなくて白船。幕府や外来の船を「黒船」と呼ぶのに対して、民衆の乗る、白木のままの船を「白船」と呼んだという。古来文化をはこぶ役割を担ってきたのは船。本を種として、次代へと文化を伝え継ぐ船となる。そのために、出版という手段を生かす。これが「白船社」という屋号の趣旨である。

「伝える」ために命を使う

独立して一年が過ぎた。今春から「舷燈社」から「白船社」へと社名変更し、法人化して今一度出帆した。



『Little Kettle』
中村友美・著　ホンマタカシ・写真
白船社刊　B6判上製　40頁
本体価格3000円＋税　ISBN 978-4-87782-148-7

今年5月には二冊目を刊行した。こちらはやかんの写真集。「やかんの写真集を出します」と話すと、たいてい「えっ（正気か？）」という顔をされる。これは一冊目『Less is』に続くシリーズ二作目で、奈良の金工家・中村友美さんのやかんの作品集。

「やかん」というと、どうも野暮ったい印象を抱かれがちかもしれない。だが中村さんのやかんは、いわば「湯を沸かすオブジェ」。佇まいに洗練がある。さらにホンマさんならではの透徹な写真一枚一枚がその既成概念を鮮やかに裏切っていく。アトリエでの制作風景、展示風景、使われている風景。それらが並び、美しい曲線美と直線美がつらなる。

タイトルの『Little Kettle』は「ちいさなやかん」の意。小文字の「t」のつらなりをやかんの重なりに見立てつつも、「Less」と「Little」、大切なことは大きさではないという価値観を示すシリーズ名にしたかった。おかげさまで、発売後すぐに重版出来。

一石を投じて、新しい価値を示すこと。この本を通じて、これも出版の役割だと気付かされた。

船主交代した今、力になりたいのは日本の伝統文化だ。

たとえば「漆」。原始時代から人と暮らしに添ってきた樹液で、漆芸は日本に千年以上も脈々と培われてきた王道文化。かつては漆＝「japan」と呼

ばれていたくらい日本を象徴するものだったのに、今の日本ではコアな文化というか、どうもなじみが薄くなっている。割れた器に金継ぎをしたり、漆畑で草刈りをするなかで、漆への間口を広げるすべを模索している。

また、出版以外に、編集や執筆として協働するものもあり、最近では北九州市の広報誌である『雲のうえ』の編集に関わらせていただいた。こちらは2006年の創刊以来16年にわたって、北九州市の「顔」を伝え続けてきたフリーマガジン。角打ち・工場・祭り・食堂・関門海峡など、毎号ツボを突いた特集内容で、「えっ、行政の広報誌？」と誰もが驚くほど美しく、手の込んだクオリティなのだ。流通するだけが本じゃない。「伝える」というかたちを考えさせられる。

出版（publish）の語源は「人々に広く知らせる」。世に知られていないこと、埋もれていること、失われてしまいそうなこと、「これは未来に残さなくては」と思うこと。出版を通じてそれらの価値を新たに照らすことに命を使いたい。そう思っている。

（かしわだ・はな／白船社代表）

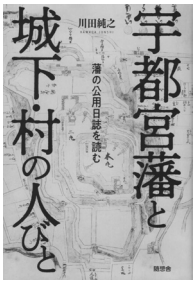
＊

▼ Instagram
www.instagram.com/shirofunesha/

新刊ダイジェスト

表示されている値段は本体価格となっております。ご購入には別途、消費税がかかります。

『宇都宮藩と城下・村の人びと －藩の公用日誌を読む』●川田純之著



宇都宮藩は代々譜代大名が配置された。藩主は宇都宮城の城主（城持）の家格を与えられ、石高は７万７０００石（戸田家藩政期）。下野最大の藩である。江戸幕府が成立して１００年間は奥平家や「宇都宮釣天井事件」でお馴染みの本多正純などが歴任、１８世紀に入ると宝永７年（１７１０）に戸田忠真が越後国高田から移封される。途中、松平家に変わった時期もあったが、以後、幕末に至るまで戸田家が治めることになる。その戸田家には古文書群が伝来するが、県立文書館所蔵の一部に「当用留」と呼ばれる藩の公用日誌が含まれる。江戸屋敷で作成されたもので、恐らくは留守居役が関わっていると著者は想定する。

日誌の内容から、藩主の動向のみならず藩政全般に関して知ることができる。いわゆる第１級史料と言ってよい。現存最古は安永１０年（１７８１）で明治初期まで５０点が残る。内容について一部紹介してみる。

五街道の一つである日光道中が宇都宮城下で奥州道中と分岐する。そのため並木の管理や橋の修復など戸田家の家来が道中奉行に伺いや問い合わせをしたりしており、街道の維持・管理に苦慮する様子が窺い知れる。また日光社参の際には宇都宮城が将軍の宿城となった。社参が公表されると老中と藩主間で準備に関するやり取りが行われた。その他、家臣による出奔・欠落・永の暇（追放）・久離（勘当）、あるいは窃盗・強盗・殺人などの犯罪に関する記事を通して江戸の日常にも触れられる。（Ｉ）

◆ 2000円・四六判・265頁・**随想舎**・栃木・202205刊・ISBN9784887484023

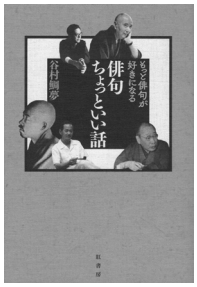
『汐さいの地図』●梅田うめすけ著

日本全国を測量し、精密な日本地図を作ったことで知られる伊能忠敬。彼の人生を描いた小説が本書です。忠敬を題材とした小説は今までも数多くありましたが、本書はそれらとは一線を画します。

忠敬は下総佐原の商人として壮年期までを過ごし、晩年になってから幕府天文方の高橋至時に弟子入りしたのは良く知られています。しかし本書はその大半を忠敬が測量を学ぶまでを描くことに費やされています。佐原の商人となるもっと前、九十九里の浜役を務める漁師の家に生まれ、海辺の村に暮らした子供時代から物語は始まります。そして彼の人生と並行して描かれるのが、江戸時代に禁制となっていた日蓮宗不受不施派の信仰です。日蓮宗の信徒からしか布施を受けない不受不施派は、幕府の権力になびかず弾圧の対象となっていましたが、九十九里をはじめとする房総には隠れて信仰生活を維持している人々が多くいました。硬い意思で信仰を貫く人たちの存在が物語に陰影を与えています。もうひとつ忠敬に欠かせないのが、地縁や血縁で結びついた人間関係です。忠敬自身は家族の縁に薄く、三人の妻を亡くし晩年には嫡子にも先立たれています。それでも多くの人々が有形無形の力で彼に力を与えていました。最終章で忠敬が離縁した婿養子の子に会いに行く場面は胸に迫るものがあります。日本地図作成という大業を成し遂げた伊能忠敬がどのような風土に生き、成長していったのかを丹念に描いています。（副隊長）

◆ 1500円・四六判・302頁・**ごまめ書房**・千葉・202206刊・ISBN9784902387322

『もっと俳句が好きになる　俳句ちょっといい話』●谷村鯛夢著



あれやこれやの本や雑誌から古今の俳句ネタを掘り起こし、心に残るエピソードとともに溢れんばかり俳句愛を語る一冊。読み進めるうちに俳句史、俳壇史、俳句論まで押さえられるという趣向である。著者は出版プロデューサーで俳句結社「炎環」同人会会長。取り上げられるのは、高浜虚子や正岡子規といった名のある俳人はもちろん、芥川龍之介や大岡信といった作家、詩人、さらには徳川慶喜、桂米朝等々歴史上の人物やら芸人やら実に多彩な人々の俳句エピソードが満載である。「八月や六日九日十五日…各地の多くの詠者」「浴衣着て戦の記憶うするるか…大橋巨泉」「風雪に耐えて五年の八重桜…安倍晋三」などその目次を見るだけで触手が伸びる。全てを紹介しきれないのが残念であるが、中で特に印象に残ったのものに俳号「風天」で俳句をやっていたという故・渥美清さんの項がある。「天皇が好きで死んだバーちゃん字が読めず」などその作品は、伝統俳句のルールということ以前に、著者が言うようにけれん味がなくどこか品がよく、その人柄や生涯が滲み出ているようである。もう一つあげるなら、久保田万太郎「東京に出なくていゝ日鷦鷯（みそさざい）」という、ある句会での一句にちなんだエピソード。同席の人から「先生、みそさざいがいましたか」と問われ「見なけりゃ作っちゃいけませんか」と万太郎は答えた…よく知られたエピソードであるようだが、写生よりもリズムの心地よさを重んじ、あとから季語を乗せた、という俳句の本質にかかわるような話である。（T）

◆ 1500円・四六判・229頁・**紅書房**・東京・202205刊・ISBN9784893813534

『韓国の「街の本屋」の生存探究』●渡辺麻土香 訳 / 石橋毅史 解説 / ハン・ミファ 著

世界初の本は、現在のイラクがあるシュメール地方に紀元前四千年頃登場した粘土板。ギリシャやローマでは紀元前八世紀頃から蠟板が使用されていた。その後も本は変化を続け、紙の本になるまでに多くの歳月が費やされた。2000年代に入るとタブレットやスマホでも本を読めるようになり、見た目は五～六千年前に粘土板や？板を使う人の姿と重なっている。この先、紙の本はどうなるのか？　活字離れが叫ばれ、残念ながら日々どこかで本屋が閉店している。しかし、近年の韓国は個人経営の小さな書店やブックカフェが続々と誕生している。

本書は韓国各地へ出かけ、当事者の声を拾い、このムーブメントを情熱的に報告した韓国の出版評論家の力作。2020年に刊行されたが、日本語訳の出版にあたり、アジア諸国の状況に詳しく、韓国へも足を運んでいる出版ジャーナリストが案内人を務めることで日本の本屋と比較可能になり、エピソードやコメントも挟まれる斬新な構成となっている。供給率の平等化、図書定価制の完全化など、実際的な点も考察しつつ、各本屋の形態を紹介。「小さな本屋を『生態系の一部』と考えてほしい。本には、つくる人、流通させる人、買う人がいる。つながりを生みだすよう努めなければならない」というある店主の言葉に凝縮された本屋の役割。夏葉社代表の島田潤一郎の寄稿も巻末に収録。

厳しい状況ながらも街の本屋に関わる全ての人へ送られる著者ならではのメッセージが溢れている。（Y）

◆ 2000円・四六判・281頁・**クオン**・東京・202205刊・ISBN9784910214344

『蘭学の九州』●大島明秀著

江戸時代、西欧の文化、科学、技術、医学は、国交・通商の窓口であった長崎に到来するオランダ語の書物とオランダ人から学び、それを蘭学と呼んだ。蘭学の「学」は学問ではなく、「学習」であると著者はいう。オランダとの交流は、1600年の豊後国臼杵へのオランダ船漂着に端を発し、1609年、平戸にオランダ商館が設置されて公式なものになった。長崎には知識と情報を求め、全国から遊学者が集った。蘭学の中心にいたのは阿蘭陀通詞と呼ばれた通訳である。代表格は長崎の商家に生まれ志筑忠雄で、ケンペルの論文から「鎖国」の語を創出したことで知られる。最大の功績は、オランダ語文法書『三種諸格』（1803-06頃）の執筆である。それ以前の翻訳は、訳した単語に日本語を当てる「欧文訓読」であった。『解体新書』も同様である。志筑は品詞の使用法などオランダ語文法を理解し、正確に日本語に置き換えた。その苦心の道のりが克明に記される。まさに蘭学の革命であった。

さらに、九州諸藩が蘭学の最前線を担ったことを明らかにする。藩主はこぞって蘭書や器物を購入し、通詞や学者を抱えて藩政に取り入れた。薩摩、福岡、佐賀藩などの反射炉築造、牛痘種痘、軍事科学導入、薬品・爆薬・ガラス等の製造、中津藩の蘭和辞書編纂事業、福岡藩第十代藩主黒田斉清は博物学や海外事情に関心を抱いてしばしば長崎を訪ねシーボルトに接見した。蘭学は九州の土地の記憶であり、九州史そのものである。（飯澤文夫）

◆ 1600円・四六判・141頁・**弦書房**・福岡・202205刊・ISBN9784863292505

☆話題の書

地方・小扱い書誌近刊☆新刊案内blogより

【旅に唄あり　復刻新版】
岡本おさみ著
岡本おさみ生誕80年・山陰中央新報創刊140周年記念出版
今年夏 発売予定
発行・山陰中央新報社

「襟裳岬」「落陽」「旅の宿」「思い出にしてしまえるさ」―。吉田拓郎、南こうせつらの名曲誕生の秘話。

放浪の作詞家が70年代の旅でたくさんの人と出会い、45年前に著したエッセイ。今も心に残ることばが生まれた放浪の旅をたどる。

吉田拓郎、南こうせつら数々のアーティストに詞を提供し、多くのヒット曲を世に送り出した放浪の作詞家・岡本おさみ。70年代の旅で書きとめた「ことば」を紡ぎながら名曲の誕生秘話を綴ったエッセイ「旅に唄あり」が岡本おさみ生誕80年に「復刻新版」として甦る。自らの作品の解説や、詞を提供したアーティストについて語った講演内容など、貴重なコンテンツを新たに加えた永久保存版！

岡本おさみが撮影した旅の写真のほか、蔵出しの貴重な写真、南こうせつに提供した「プライベートソングⅡ」の自筆歌詞、作詞家・松本隆との1970年代の対談など掲載。

＜仕様＞
定価3,300円（本体価格3,000円＋税）
仕様：A5判、モノクロ、480ページ、上製本、ISBN978-4-87903-254-6

第1章　旅に唄あり

1977年発刊の「旅に唄あり」初版本の復刻。

岡本おさみが全国を旅して、たくさんの人たちとの触れ合いの中から生まれた「襟裳岬」「旅の宿」「落陽」「祭りのあと」（以上、吉田拓郎作曲）、「私の詩」「ヘイ・ジプシー誘っとくれ」（以上、南こうせつ作曲）などの名曲誕生の舞台裏を綴ったエッセイ。一部、歌詞も。

第2章　岡本おさみのフォーク談義

1999年に島根県出雲市での講演会の再録。第1部は岡本おさみと吉田拓郎とのコンビで日本レコード大賞、日本歌謡大賞を受賞した「襟裳岬」について誕生秘話を語る。第2部は、「黄金の花」の知名定男、〝ブルースの女王〟の淡谷のり子との出会いと曲作り、高倉健との撮影裏話、宇崎竜童との音楽、南こうせつとの若いころの思い出話などを語った。

第3章　岡本おさみが語る『わが詩』

ネットの岡本ファンとのやりとりの中で、岡本作品のうち吉田拓郎、南こうせつに提供した名曲について解説。吉田拓郎編「花嫁になる君に」「旅の宿」「祭りのあと」「都万の秋」南こうせつ編「こんな静かな夜」「野にあるものの衣着て」

第4章　岡本おさみがつなぐ人たち（寄稿）

南こうせつ（シンガーソングライター）、田家秀樹（音楽評論家）、長谷川泰二（公益財団法人とっとりコンベンションビューロー前理事長）
資料　岡本おさみ作品一覧（掲載曲のみ）

【略歴】岡本おさみ

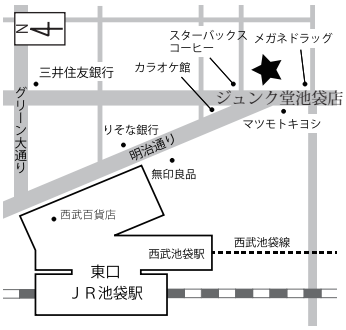
本名・岡本修己。1942年1月15日生まれ。鳥取県米子市出身。

放送作家から、フォークソングの黎明期に泉谷しげる、吉田拓郎らと出会い作詞家へ。

主な作品は、「旅の宿」「落陽」「祭りのあと」（吉田拓郎）、「こんな静かな夜」「満天の星」（南こうせつ）、「黒いカバン」（泉谷しげる）など多数。吉田拓郎作曲、森進一が歌った「襟裳岬」で日本レコード大賞、日本歌謡大賞受賞。

エッセイ「旅に唄あり」（1977年）を上梓したほか、自身初のアルバム「風なんだよ」（1978年）、岡本作品をさまざまなアーティストが歌った「岡本おさみ アコースティックパーティー with 吉川忠英」（2003年）をリリース。作詞活動の一方、芝居の作詞と訳詞に参加。ミュージカル「ラブ」（市村正親、鳳蘭、西城秀樹）、「セツアンの善人」（大竹しのぶ）、ロックミュージカル「ロッキー・ホラー・ショウ」など。男性合唱組曲「隠岐四景」の作詞（堀悦子作曲、1980年に文化庁芸術祭優秀賞）がある。2015年11月30日に心不全のため死去。享年73歳。

ジュンク堂書店
淳久堂書店
池袋本店
営業時間：月～土 / 午前10時～午後11時
日・祝 / 午前10時～午後10時
池袋であなたのふるさとに帰ってみませんか？
９階「ふるさとの棚」では、
地方・小出版流通センター扱いの
ご当地本を幅広く取り揃え、皆様の
お越しをお待ちしております。
〒171-0022
東京都豊島区南池袋2-15-5
TEL　03-5956-6111
http://www.junkudo.co.jp



売行良好書

期間：2022年6月15日～7月14日
※価格は本体価格表示です。別途消費税がかかります。

［出荷センター扱い］

(1)『あなたのための短歌集』1700円・ナナロク社　(2)『東京の森のカフェ』1300円・書肆侃侃房　(3)『小さきものの近代１』3000円・弦書房　(4)『暴れ川と生きる』1900円・忘羊社　(5)『つながる沖縄近現代史』2200円・ボーダーインク　(6)『不登校は１日３分の働きかけで９９％解決する』800円・リーブル出版　(7)『水上バス浅草行き』1700円・ナナロク社　(8)『食の人文学ノート』2000円・花乱社　(9)『出雲王国とヤマト政権』2250円・大元出版　(10)『よみきかせのきほん』750円・東京子ども図書館　(11)『左川ちか全集』2800円・書肆侃侃房　(12)『復帰５０年　沖縄を読む』1400円・ボーダーインク　(13)『不謹慎な旅』2000円・弦書房

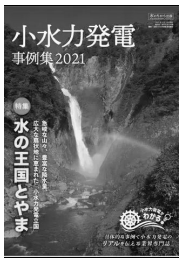
［ジュンク堂書店池袋店　地方出版社の本―センター扱い図書］

(1)『こころの風景』2000円・海風社　(2)『左川ちか全集』2800円・書肆侃侃房　(3)『ジソウのお仕事　データ改訂版』1800円・フェミックス　(4)『阿蘇踏査の歩み』2000円・不知火書房　(5)『戦国の城と石垣』2500円・高志書院　(6)『東京の森のカフェ』1300円・書肆侃侃房　(7)『子どもから障害児を「分けない教育」の戦後史』2000円・福岡県人権研究所　(8)『多摩学』2500円・ぶんしん出版　(9)『ＡＡＳ東京公式テキスト　中小企業診断士２次試験事例問題の解法　第４版』3000円・リーブル出版　(10)『サルタ彦大神と竜』2000円・大元出版　(11)『沖縄戦記 鉄の暴風』1458円・沖縄タイムス社　(12)『新装版 奥武蔵登山詳細図 全130コース』900円・吉備人出版　(13)『ナガサキの郵便配達』809円・スーパーエディション　(14)『歩く』3000円・青磁社　(15)『まんがで伝える沖縄戦　下』1600円・琉球新報社

以下ホームページ等でも各種情報提供を行なっております。ご利用ください。
ＵＲＬ：http://neil.chips.jp/chihosho/　　ツイッター公式アカウント：@local_small

トピックス ―― ★★★

▼刊行からしばらくたっているにも関わらず、近頃不思議と多く注文を集めている『**小水力発電事例集**』（202011刊2020版ISBN 9784991107917、202110刊2021版ISBN 9784991107924）という年刊誌があり、なぜ？と思っていましたが、どうやらロシア・ウクライナ情勢に起因するエネルギー供給への懸念と、過剰に報道される電力需給ひっ迫情報の影響があるようです。確かに現下の状況において、以下当年刊誌の内容は何らかの展望を与えてくれるようです。〈小水力は環境配慮型です。発電方式の分類では、「流れ込み式」、または「水路式」となります。大規模ダム（貯水池式）、中規模ダム（調整池式）ではなく、河川の水を貯めること無く、そのまま利用する発電方式です。一般河川、農業用水、砂防ダム、上下水道など、現在無駄に捨てられているエネルギーを有効利用します。現在、国内市場は、ほとんどありません。これまでは、大中型中心の水力市場で、小水力の市場はありませんでした。現在、やっと芽が出て、育ち始めている段階です。近い将来、大きな市場の延びが期待できます。小水力技術は、小水力独自の技術です。大中水力技術の簡易型、機能省略、縮小版ではありません。小水力独自の技術開発、育成、拡大が必要です。小水力開発は、地域密着型です。地域の、地域による、地域のための開発です。地元のコンサルタント、地元の施工業者、地元業者による保守管理などで、地域の活性化、地域の雇用促進にも有効です。小水力の事業主体は、地方自治体、土地改良区、NPO、民間、個人です。これまでの電力会社主体の開発とは異なり、多様な事業主体が実施しています。」（全国小水力利用推進協議会ＨＰより）



地方・小出版物のデータになります。綴じて保存してください。

honto
ネット通販で地方・小出版流通センター扱い本がご購入いただけます。
honto.jp
hontoではお客様の読書スタイルにあわせて
電子書籍でも紙の本でもご購入でき、hontoポイントは
ネットでも書店でも使えて、貯められます。
地方・小出版流通センター扱いのご当地本もネットで
ご購入いただけます。
くわしくは honto.jp へアクセスください。